慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ゲーテの自伝プロジェクト「わが生涯から」：「著者と読者」の関係をめぐって
Sub Title	Das Verhältnis von 'Autor und Leser'. Über Goethes autobiographisches Projekt 'Aus meinem Leben'.
Author	山本, 賀代(Yamamoto, Kayo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2013
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.50 (2013.) ,p.1- 25
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	八木輝明教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Teruaki YAGI
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20130329-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゲーテの自伝プロジェクト「わが生涯から」
――「著者と読者」の関係をめぐって――

山　本　賀　代

1　ゲーテの自伝的著作研究の現状と課題

1.1　歴史的作品から詩的・詩学的作品へ

自伝研究論集『自伝――ある文学ジャンルの形式と歴史』(1989 年)[1] を編集したギュンター・ニッグルは，このジャンルのヨーロッパにおける理論研究の出発点を 19 世紀末から 20 世紀初頭，自伝を「人生を理解するための最高にしてもっとも啓発的な形式」[2] と評価したヴィルヘルム・デ

テクスト：Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens*. Hg. von Karl Richter in Zusammenarbeit mit Herbert G. Göpfert u. a. München 1985–1998.　同全集からの引用・参照は本文中に巻数，（部数），ページ数のみを示す。その他，必要に応じて以下のゲーテ全集を使用する。
Goethes Werke. Hg. im Auftrag der Großherzogin Sophie von Sachsen. 143 Bde. Weimar 1887–1919. [=WA]
Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche*. 40 Bde. Hg. von Hendrik Birus u. a. Frankfurt am Main 1987ff. [=FA]

1）Günter Niggl (Hg.): *Die Autobiographie. Zu Form und Geschichte einer literarischen Gattung*. Darmstadt 1989. 自伝研究史については，主にこの論集に付されたニッグルの序文（S. 1–17）を参照した。
2）Wilhelm Dilthey: *Plan der Fortsetzung zum Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften*. In: *Gesammelte Schriften* Bd. 7. Hg. von Bernhard Groethuysen. Stuttgart 1958, S. 199.

ィルタイに見ている。彼の弟子ゲオルグ・ミッシュが「人間の自意識の歴史」[3] としての自伝研究を引き継ぎ，自伝を作家の自己発見の歴史的記述とする解釈学的伝統が基礎づけられた。このジャンルの芸術性に関心が向けられるのは，ようやく 1950，60 年代以降のことで，大きな流れとなるのは 70 年代に入ってからである。考察対象を拡大させた文学研究は，フィクションとノンフィクションの境界にある自伝への関心を高め，文化史的・社会史的なアプローチと並んで，ますます芸術形式に注意を向けるようになった。フィリップ・ルジェンヌ[4] の提起した「自伝契約」以後，フランスやアメリカでは自伝の形式・類型に関する議論が活発化するが，ドイツでは，まもなく形式への考察と歴史的視点を結びつける研究が現れ，ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ Johann Wolfgang Goethe（1749–1832 年）の自伝的作品『わが生涯から――詩と真実』*Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit*（1811 年第 1 部出版，1812 年第 2 部出版，1814 年第 3 部出版，第 4 部はゲーテ死後，1833 年に出版，以下『詩と真実』）研究にとっても，重要な転換期を迎える。

クラウス＝デトレフ・ミュラーの『自伝と小説――ゲーテ時代の文学的自伝研究』（1976 年）[5] とギュンター・ニッグルの『18 世紀ドイツの自伝の歴史――理論的基礎づけと文学的展開』（1977 年）[6] は，ともに 18 世紀における自伝ジャンルの発展を跡づけ，ゲーテの『詩と真実』をその頂点として位置づけている。ミュラーは，ドイツで 18 世紀末に文学的自伝

3）Georg Misch: *Geschichte der Autobiographie.* Bd. 1, 1. Hälfte. 3. stark vermehrte Aufl. Frankfurt am Main 1949, S. 11.

4）フィリップ・ルジェンヌ『フランスの自伝――自伝文学の主題と構造』小倉孝誠訳　法政大学出版局　1995 年（原著 1971 年），同『自伝契約』井上範夫他訳　水声社　1993 年（原著 1975 年）。

5）Klaus-Detlef Müller: *Autobiographie und Roman. Studien zur literarischen Autobiographie der Goethezeit.* Tübingen 1976.

6）Günter Niggl: *Geschichte der deutschen Autobiographie im 18. Jahrhundert. Theoretische Grundlegung und literarische Entfaltung.* Stuttgart 1977.

が誕生し，『詩と真実』において「実用形式から文学形式へ」[7] の移行が完結したことを，やはり同時代に新しい市民文学形式として勃興した小説ジャンルの，自伝の形式発展に果たした役割と関連づけて考察している。文学的自伝は「個人的全体性への欲求とその実現不可能性の矛盾から生じたものであり，小説との生産的な緊張関係に入ることで，この矛盾をさまざまな視点から反映する」[8]。一方，ニッグルは敬虔主義から『詩と真実』までのあらゆるタイプの自伝の発展と変遷を分析し，さまざまなタイプの伝統の自由な混合や世俗化が進み，それらがゲーテによって統合されたと結論づけている[9]。

ミュラー，ニッグルに続き，1979 年に発表された論文「詩学としての自伝――ゲーテの『詩と真実』の芸術形態」[10] でベルント・ヴィッテは，作品の文学的意義を歴史的あるいは人間学的意義の下位に置き続けたそれまでの研究アプローチを厳しく批判した。伝記的・歴史的なことがら，作品の成立事情についての詳細な研究は，ゲーテの人生と作品を総合的に解釈しようとするばかりで，テクストの意義を問うことをしてこなかったという。「従来の研究は，この作品が真実かどうかということばかりを研究してきた。しかし，この作品が何を意味しているのかについては相変わらず不明のままである」[11]。『詩と真実』はゲーテの人生の統一ではなく，彼の創作の統一性を示すものであり，「書くこと」の機能を主題化した詩学的芸術作品であるというヴィッテの問題提起は，テクストの美的統一性に正面から取り組む新しい研究の方向性を明確にした。

フィクションとしての『詩と真実』解釈の例として，読書を主題とした

7）Müller: a. a. O., S. 242.

8）Ebd., S. 276.

9）Niggl: *Geschichte der deutschen Autobiographie im 18. Jahrhundert,* S. 168ff.

10）Bernd Witte: *Autobiographie als Poetik. Zur Kunstgestalt von Goethes „Dichtung und Wahrheit“*. In: *Neue Rundschau* 89 (1978), S. 384–400.

11）Ebd., S. 385.

小説としてこの作品を読むギーゼラ・ブルーデ＝フィルナオを挙げることができる[12]。すでにユルゲン・ヤーコプスが『詩と真実』を一種の教養小説として考察したように[13]，ブルーデ＝フィルナオもフィクションの地平での虚構の読者の発展物語を跡づけ，そこに省察の地平における志向された読者という作用美学的視点を加え，ゲーテが現実の読者自身にも解放された自律的読書を要求していると論じた。ガブリエーレ・ブロートの『人生のメールヒェン――詩的および詩学的テクストとしてのゲーテの《詩と真実》』（2003 年）[14] もこの作品を詩的および詩学的テクストとして解釈する試みである。ここでは，小説との関係以上に，『詩と真実』を自伝とメールヒェンの統合形式という枠組みのなかで考察することの有効性が主張される。

1.2　自伝プロジェクトの全体像

しかしブロートが論考の最後で，今後の課題として，ゲーテの第 2 の自伝的著作『イタリア紀行』*Italienische Reise*（最初は 2 分冊で 1816 年に『わが生涯から――第 2 部門第 1 部』，1817 年に『わが生涯から――第 2 部門第 2 部』として公表され，1829 年にこの 2 分冊に『第 2 次ローマ滞在』*Der Zweite römische Aufenthalt* が加わり，全体として『イタリア紀行』となる。以下，本稿で『イタリア紀行』と呼ぶ場合，最初の第 1 部，第 2 部を指し，『第 2 次ローマ滞在』を含む場合は「全 3 部」等，注記する）とメールヒェンの関係についても考察を続けるべきであろうと付

12）Giesela Brude-Firnau: *Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit (1811–31).* In: Paul Michael Lützeler u. a. (Hg.): *Goethes Erzählwerk. Interpretationen*. Stuttgart 1985, S. 319–343.

13）Jürgen Jacobs: *Wilhelm Meister und seine Brüder. Untersuchungen zum deutschen Bildungsroman.* München 1972, S. 96–99.

14）Gabriele Blod: *„Lebensmärchen“. Goethes „Dichtung und Wahrheit“ als poetischer und poetologischer Text.* Würzburg 2003.

け加えているように[15]，ゲーテの自伝研究の対象は『詩と真実』だけではない。

『詩と真実』全4部，『イタリア紀行』全3部，1822年に『わが生涯から――第2部門第5部』として出版され，その後『滞仏陣中記1792年』*Campagne in Frankreich 1792*（1822年）および『マインツ攻囲』*Belagerung von Maynz*（1822年）とされた戦争手記（以下『滞仏陣中記』『マインツ攻囲』），さらに1749年から1822年までの活動を年代順に記録した『私のその他の告白の補足としての年代記』*Tag- und Jahreshefte als Ergänzung meiner sonstigen Bekenntnisse*（1830年，以下『年代記』），その他にもゲーテが残した小規模な自伝的作品は多数存在する。少なくとも「わが生涯から」シリーズとして構想された作品群と『年代記』は，晩年のゲーテが生涯の集大成として力を注いだ『決定版全集』*Ausgabe letzter Hand*（1827–1830年に全40巻が刊行）の構想（1825年1月13日付）において，ひとつの大きなグループ「伝記的著作」（Biographisch）を形成していた[16]。そのリストによれば，『詩と真実』3巻（当時すでに公表済み），1775年までの断片（＝後の第4部）1巻，さらに1786年までを描く『詩と真実』第5部が計画されていたことがわかる。そして『イタリア紀行』2巻（公表済み），「ローマのカーニヴァル」を含む『第2次ローマ滞在』（1829年に刊行）1巻，『滞仏陣中記』『マインツ攻囲』（公表済み）1巻，『わが人生の年代記』（＝『年代記』，1830年刊行）2巻が予定され，全11巻の「伝記的著作」グループが構想されていた[17]。

また，当初「わが生涯から」シリーズは『詩と真実』系の第1部門と，『イタリア紀行』系の第2部門とに分けられていた。1822年の戦争手記が初版の段階で「第2部門第5部」とされたのは，1786年から1788年の

15）Ebd., S. 323f.

16）WA I, 42–1, S. 455ff.

17）1826年3月のゲーテ自身による全集広告文でも合計11巻に変更はない。Vgl. 13–1–531.

イタリア旅行（全3部）に続き，1790年の第2次イタリア旅行（ヴェネツィアまで）およびシュレージエン旅行が第4部として予定されていたからであるが，この計画は1825年には断念されていたことが分かる。『詩と真実』第5部，つまり第1次ヴァイマル期の「わが生涯から」も実現しなかったので，両部門5部構成の計画は，最終的にはそれぞれ4部構成となった。そして『詩と真実』第4部は，ゲーテ生前の全40巻『決定版全集』には間に合わず，ゲーテ死後，遺稿管理を任されたヨーハン・ペーター・エッカーマンとフリードリヒ・ヴィルヘルム・リーマーの編集を経て，1833年に『決定版全集』の遺稿集第8巻となった。

『詩と真実』の最初のシェーマ（1809年）[18] で，ゲーテは自分の全人生の記述を企図していた。『詩と真実』執筆をとりあえずヴァイマル出発までで終える決定をした1813年秋以降も，ゲーテは自分の全人生の作品化の計画を捨てず，『決定版全集』の計画において第1次ヴァイマル期の「わが生涯から」に執着していたことが伺える[19]。ゲーテの自伝といえば，『詩と真実』が取り上げられることが多いが，それは全生涯を作品化しようという彼の自伝プロジェクトの一部にすぎない。『詩と真実』は作家ゲーテの人生についての単なるドキュメントという呪縛を逃れ，近年，ようやく自律した美的作品として評価されるようになったが，それと同時に，エルヴィーン・ザイツも指摘するように[20]，晩年のゲーテがこだわり続けた自伝プロジェクトの全体像を視野に入れ，その枠組みのなかで『詩と真実』の位置を確認する必要があるだろう。

18）Vgl. 16–835ff.

19）『決定版全集』の企画において，ゲーテの自伝的著作全体がどのように計画され，成立したか，あるいは実現しなかったかを跡づけたのは，Waltraud Hagen: *Goethes autobiographische Schriften in der Inhaltsplanung der Ausgabe letzter Hand*. In: *Goethe Jahrbuch* 90 (1973), S. 168–185.

20）Erwin Seitz: *Talent und Geschichte. Goethe in seiner Autobiographie.* Stuttgart u. Weimar 1996, S. 25ff.

1.3　本稿の目的

このように『詩と真実』研究は今日，自律的な作品としての議論を深める一方で，自伝プロジェクトという枠組みへの視点を補うという課題をもっている。『詩と真実』第 1–3 部と第 4 部成立のあいだに他の自伝的作品がすべて成立していることを考慮すれば，自伝プロジェクト全体を概観することは『詩と真実』の作品分析にとっても大きな意義をもつはずである。本稿では，そのような考察のひとつの可能性として，「著者と読者」をめぐるゲーテの省察に着目する。「著者と読者」は『詩と真実』の重要なテーマであると同時に，自伝プロジェクト全体を通じて模索され続けたと考えるからである。第 2 章では，「著者と読者」の理想的関係から生まれた企画という設定にもかかわらず，「著者と読者」の決裂を描いて終わる『詩と真実』の第 1 部から第 3 部までを考察する。第 3 章では，この問題が「わが生涯から」シリーズの他の自伝的作品にどのように関連しているかを跡づける。第 4 章では，自伝プロジェクトの締めくくりとなった『詩と真実』第 4 部で，「著者と読者」をめぐる描写がどのように変容していったのかを，第 1 次スイス旅行のエピソードを例に検討する。

2　「著者と読者」をめぐる省察――『詩と真実』第 1–3 部

『詩と真実』第 1 部の序文で，ゲーテはこの作品を，時代全体のなかで自分が受けた影響や，そのなかで自分がどのような世界観・人間観をつくり上げたかを示す「伝記の主要課題」（16–11）に誠実に取りくみつつ，「すでに書かれた作品を素材として扱い，それらの作品の最後に位置するものにまで仕上げる」（16–10）文学的試みであると説明している。そして，このような自伝を書くきっかけとなったひとりの友人からの手紙を引用する。この好意的な読者は，一見ばらばらに見えるゲーテの全集（1806–1810 年にコッタから刊行された第 1 次全集）をよりよく理解するために，全体の内的関連を読みとるための手がかりを著者に要求している。

> そこであなたに懇願したいことは，まず，この新しい全集で一定の内的関連にしたがって配列されているあなたの文学作品を年代順に並べ，作品の素材となっている生活状況や心境，さらにあなたに影響を与えた先例，あなたが準拠された理論的原則などを，ある程度関連づけて打ち明けていただけないかということです。（Ebd.）

ゲーテは最初の全集（1787–1790 年のゲッシェン 8 巻本作品集）出版の際，「ドイツはもはや私のことをわかっていなかったし，わかろうともしなかった」（12–70）とひどく落胆し，ここで話題になっている第 1 次コッタ全集編集の際にも，自分の作品の一貫性のなさや断片的性格を気にし続けた。全集の内的関連性を年代順に，生活状態，心境，影響を受けた作品や理論との関係のなかで説明してもらいたいという読者の要望は，「わが生涯の総計」[21] であるべき自分の全集に対する著者の不安や読者に対する不満を裏返した架空の設定である。自伝執筆の契機には，「著者と読者」の理想的関係へのゲーテの願望や省察が関与していたと考えられ，この関係は作品の主題のひとつとなる。

「すでに書かれた作品を素材として扱い，それらの作品の最後に位置するものにまで仕上げる」試みは，第 3 部 12 章から始まる『若きヴェルターの悩み』*Die Leiden des jungen Werther*（1774 年，以下『ヴェルター』）をめぐる描写で頂点を迎える。

> 自分の企図がこの段階に至った今，著者は初めてこの仕事を気楽に進められるような気がしている。というのも，今ようやくこの書物はその本来あるべきものとなるからである。この書物は独立的なものとして考えられたのではなく，むしろ著者の人生の空隙を満たし，いくつかの断片を補足し，忘れられ消えていった冒険の思い出を保存するために書かれているからである。［……］ここで言われているのが小著『ヴェルター』であることは，これ以上説明する必要もないであろう。（16–575f.）

21）1788 年 2 月 16 日付，カール・アウグスト公宛て書簡。FA II, Bd. 3, S. 388.

前年に匿名で発表した『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』*Götz von Berlichingen mit der eisernen Hand*（1773 年，以下『ゲッツ』）および『ヴェルター』出版とともに，彼の人生物語において「著者」としてのゲーテが登場する。理想的な「著者と読者」の関係から生まれた『詩と真実』の主人公ゲーテは，しかし『ヴェルター』をめぐる 13 章で，「著者と読者」との大きな乖離を決定的に体験することになる。『ヴェルター』の草稿を読んだ友人たちの反応は，次のように描写される。

> もちろん効果を生みだしたのは，またもや素材であった。そのため彼らは私と正反対の気分になった。［……］私は，総告白のあとのように再び朗らかになり，解放されたように感じた。［……］しかし私が現実を詩に変えたことによって重荷をおろし，目を開かれた気持ちになっていたのに対して，友人たちは詩を現実に変え，そのような小説を模倣して，場合によっては自分に発砲しなければならないと信じ，混乱していた。（16–621f.）

一般読者の反応も同様に分析される。「精神的な作品を精神的に理解することを大衆に期待することはできない。すでに友人たちのもとで経験したように，注意をひいたのは実はストーリー，素材のみであった」（16–623）。前年の『ゲッツ』受容の実情――不本意な批評，素材にしか向けられない大衆の関心，史実の間違いを指摘する実業家，そして同じような作品（＝商品）1 ダースを要求する出版者――から，おおよその反応は予測されていたが，なによりゲーテを落胆させたのは親しい知人のあいだでも理解されないことであった。

> 『ヴェルター』に対して批判されるであろうことにはすべて，あらかじめ心の準備ができていたので，あれほど多くの悪評にもまったく不愉快にならなかった。しかし，私と心をともにする好意的な人々に耐えがたい苦痛を与えられようとは考えてもいなかった。つまり，あるがままの私の小品について私を喜ばせる言葉を聞くかわりに，誰もがあの物語の何が真実なの

> かを執拗に知りたがったのである。これには非常に腹が立ち，私はたいてい無愛想に返事をした。というのもこの質問に答えるためには，長らく試行錯誤し，諸要素に詩的統一を与えた私の小品を，再びばらばらにしてその形式を破壊しなければならなかったからである。（16–625）

こうして「著者と読者」の省察は，序文の無意味さという結論に至る。

> このように悩まされて，彼は，著者と読者とは巨大な深淵で分かたれていることを，そしてありがたいことに，両者ともそれをまったく理解していないことを，あまりにもはっきりと見抜いた。したがって彼は，序文というものがすべてどれほど無駄であるかをずっと昔に見抜いてしまっていた。というのは，著者がその意図を明らかにしようとすればするほど，ますます混乱の原因を与えることになるからである。さらに著者が序文にどれほど言葉を費やしても，著者がそらそうと努めた要求を，読者は相変わらず著者につきつけることをやめないであろう。（16–627）

ここで語り手は，三人称を使用して意識的に主人公ゲーテから距離を取ろうとしているが，かえってその心情を暴露しているようにみえる。序文の無力さを確信したのは，実際に『詩と真実』執筆中のゲーテだったのかもしれない。第 1 部に理想的な読者からの手紙に始まる序文を付したゲーテは，第 3 部にも作品の意図を解説する序文を用意していた。しかし結局この文章は不採用になり，以後，ゲーテの自伝的著作には序文が書かれなくなる。再び序文が付されるのは『詩と真実』第 4 部であるが，それはもはや短い形式的なものにすぎない。

『ヴェルター』をめぐって執拗に繰り返される読者への不満は，彼らが形式への視点をもたず，作品の素材ばかりに関心を示したことに集中しているが，『ヴェルター』以前のゲーテもまた，そのような素材への関心に支配された読者であったことが，フリーデリーケ物語のなかで描かれている。『ゲッツ』，『ヴェルター』以前のゲーテ物語は，「著者」ではなく「読

者」としてのゲーテの成長の記録として読むことができる[22)]。幼年時代から段階を追って報告されてきた「読者」としてのゲーテの成長は，第2巻10章と第3巻11章にまたがるフリーデリーケ物語のエピソードで決定的な転回点を迎え[23)]，読者としての成長を経て『ヴェルター』の「著者」が誕生したことを示唆している。このことは，2つの章で繰り返されるイギリス小説『ウェイクフィールドの牧師館』の朗読での主人公に与えられた役割の違いとしても，対照的に描きだされている[24)]。

10章で小説を朗読するのは文学の先輩ヘルダーで，彼との比較を通じて青年ゲーテの文学理解が際立たせられる。「内容と形式にのみ注目している」（16–460）ヘルダーは，ゲーテが「素材に圧倒されている」（Ebd.）ことを厳しく批判する。ヘルダーが「作品を単に芸術の制作物とみなす」（Ebd.）のに対し，ゲーテは「まだ芸術作品が自然の産物と同じように働きかけてくるに任せる」（Ebd.）段階にあった。主人公がヘルダーの指摘する小説のイロニーを認識するのは後のことであるが，語り手ゲーテはすでにこのイロニーの視点を利用して，現実のゼーゼンハイムをウェイクフィールドの世界に重ね合わせていく。主人公ゲーテと『詩と真実』の読者は，「まもなくこの架空の世界から，これと似た現実の世界へと連れ込まれて」（16–461）いくのだ。

第2部の最後で，後に『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』

22）ブルーデ＝フィルナオは『詩と真実』を，ゲーテを中心人物とした「読者の発展小説」と呼んでいる。Brude-Firnau: a. a. O., S. 331.

23）Witte: a. a. O., S. 396.

24）フリーデリーケ物語に関する研究には，事実関係をめぐる古い歴史的考察から詩的性格を強調する新しい考察への関心の移行がはっきり現れている。Vgl. Pierre Grappin: *„Dichtung und Wahrheit“ – 10. und 11. Buch. Verfahren und Ziele autobiographischer Stilisierung.* In: *Goethe Jahrbuch* 97 (1980), S. 103–113; Edgar Bracht: *Wakefield in Sesenheim. Zur Interpretation des zehnten und elften Buches von Goethes „Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit“.* In: *Euphorion.* Bd. 83, Heft 3 (1989), S. 261–280.

Wilhelm Meisters Wanderjahre oder die Entsagenden（1821/29 年，以下『遍歴時代』）に収められる「新メルジーネ」を物語って，ゲーテはフリーデリーケとその姉から大きな反響を得る。ところが，第 3 部が始まると，すぐにこの物語の成功はイローニッシュな光のもとにさらされる。ゼーゼンハイムの娘たちはゲーテの話に現実の男女関係が描かれていると考え，興味を示しただけであると知らされるからである。現実とフィクションを混同するフリーデリーケたちと青年ゲーテとのあいだに，小さな距離が生まれる。さらに『ウェイクフィールドの牧師館』を今度はゲーテ自身がゼーゼンハイムで朗読することになる。娘たちは「鏡に映る自分たち」（16–496）を見て喜び，朗読は若い恋人たちに良い影響を与えたという。ここで語り手ゲーテは，「現実的役割と観念的役割」（Ebd.）の分裂を感じはじめた若者が，小説中の人物と自分を重ね合わせることを是認し，これを人間の美しい欲求として承認するコメントを付け加える。ところが主人公のほうでは，現実とフィクションとの混同状態から急速に身をひきはじめる。ゲーテのこの変化は，町で娘たちと再会したエピソードにおいてさらにはっきりと現れる。ウェイクフィールドという文学的効果を奪われた姉妹のうち，姉は環境のギャップに耐えきれず，妹のフリーデリーケはまったく普段どおりであった。一方，ゲーテはその中間状態であったという。つまり，現実と観念の分裂を意識して苦しむ姉と，そのような分裂を知らない素朴なフリーデリーケの両者を理解しつつ，どちらからも距離を取るゲーテは，状況全体を見渡す新しい場所に，ほんの少し位置をずらしたのである。

これは 13 章で語り手ゲーテが詩の本質として省察する「鳥瞰図」の視点のかすかな萌芽といえる。

> 真の詩は，世俗の福音として，内的な明朗さと外的な快適さによって，私たちにのしかかる地上の重荷から私たちを解き放つことができる。それは気球のように，私たちに結びついた底荷もろとも，私たちを高みへと引き

あげ，地上の錯綜した迷路を鳥瞰図のように私たちの下に繰り広げてみせる。どんな陽気な作品であれ，どんな厳粛な作品であれ，成功した才気豊かな表現によって，詩は喜びも苦痛も適度に和らげるというひとつの目的をもっているのだ。（16–614）

イギリス小説の読書体験によって芸術形式への視点を学んだことで，素材ばかりを追う読者と主人公とのあいだに溝が生まれ，この亀裂は『ヴェルター』体験で決定的となる。この状況は第 3 部の終わりまで変わらない。14 章で若きゲーテは，ナッサウのフォン・シュタイン夫人のサロンで「『ヴェルター』の真偽とロッテの住所」（16–658）について証言させられてうんざりする。「童話のなかのどこが真実でどこが詩なのか」（16–659）など気にも留めない子供たち――これは第 1 部の「新パリス」時代への懐古といえる――をありがたく思う。大衆と折りあいをつけようとするラーヴァータやバーゼドーを，尊敬すると同時に哀れに思う。「著者と読者」の理想的関係からはじまった『詩と真実』の執筆は，「著者と読者」の決裂という『ヴェルター』体験を描いたところで中断し，未解決の問題を抱えたまま[25]，ゲーテの回想はイタリア旅行時代へと移っていく。

3　理想的な「著者と読者」を求めて――「わが生涯から」の第 2 部門

『詩と真実』第 1 部公表の 1 年前に発表された『色彩論』*Farbenlehre*（1810 年）の歴史編は，「色彩論に従事してきた卓越した人々の見解が所蔵されたアルヒーフ」（10–476）として構成されている。ゲーテの編集方針は，第 1 にそれぞれの著者自身に語らせること，そして第 2 に「重要な研究者に関してその性格を素描し，ひとりひとりの伝記を大雑把ながらもアフォリズム風に伝える」（10–477）ことであった。そして一連の伝記

25）詩作と人生の真実との関係の省察に『詩と真実』の主題をみるザイツの考察では，『ヴェルター』体験を描くことで『詩と真実』の目的は達成されたとみなされる。Seitz: a. a. O., S. 321ff.

的スケッチを終えた後，ゲーテは自分自身についても，「一篇の詳細な物語」（10–903）に代わる「大規模な告白の一章」（Ebd.）として「著者の告白」と題した短い文章を付け加えている。

世間からまず詩的才能を認められた著者は，やがて比較対象を求めて造形美術に目を向け，イタリア旅行によってその望みをかなえた。しかし，そこで説明のできない色彩の問題に直面し，自然科学研究に足を踏み入れることになったという。

> このようにして私は，自分でほとんど気づかぬうちに，未知の分野に入り込んでいた。つまり私は文学から造形美術へ，造形美術から自然研究に転じ，そして補助手段にすぎなかったはずのものが，今や目的として私を魅了していたのである。しかし私は十分長い期間この未知の分野で活動してきたので，生理学的色彩およびその精神的，感覚的効果一般を通じて，再び美術への幸福な帰路を見出したのである。（10–917f.）

ゲーテは自分の人生の歩みを，文学に始まり芸術を経由して自然科学に向かったとし，さらにこの道が再び芸術に帰路を見出すものであったと振り返る。実際にこの道筋にそくして，ゲーテは翌年より一連の自伝的著作「わが生涯から」シリーズを発表する。『詩と真実』は文学者として滑りだす彼の人生物語，第 2 の「わが生涯から」は 1786 年から 1788 年にかけてのイタリアでの造形美術体験の記録，そして第 3 の「わが生涯から」は，1792 年および 1793 年，ゲーテの関心が自然現象に向けられていた時期の従軍記録となっている。ゲーテの人生に対応する「わが生涯から」シリーズは，さらに少しずつ補完される。まず 1829 年に『第 2 次ローマ滞在』を発表し，「わが生涯から」シリーズの造形美術部門を補足する。さらにゲーテは 1831 年に『詩と真実』第 4 部を脱稿し，文学部門を補足する。回想された人生のなかで，ゲーテは造形美術への帰路のみならず，彼が自分の「存在の中心と土台」とみなした「詩的形成衝動」（4–2–515）の領域，つまり文学領域への帰路も見出したのである。以下，「著者と読

者」の問題がどのように取り込まれているかに焦点をしぼり，「わが生涯から」第 2 部門を成立順に考察していく。

3.1 『イタリア紀行』

『詩と真実』第 1–3 部に続く「わが生涯から」の第 2 部門『イタリア紀行』で，「著者と読者」をめぐる記述は，旅行記の意義を省察する第 2 部の最後の報告のなかに見出すことができる。

> ［……］旅行は，それをやり遂げた本人にはひとつの流れのなかで過ぎていくように思われ，想像力のなかでは常に連続するものとして現れてくる。しかしそれを本当に報告することは，実際には不可能なことではないだろうか。物語る人はすべてをひとつひとつ配置していかなければならない。しかしそこから第三者の心のなかに，いかにしてひとつの全体が形成されるのだろうか。
>
> それゆえに，君たちが熱心にイタリアとシチリアについて調べ，旅行記を読んだり銅版画を眺めたりしているという，君たちの最近の手紙のなかの言葉ほど，私を慰め，喜ばせてくれるものはなかった。それによって私の手紙がより意味を増しているという証言は，私にとって最高の慰めである。［……］そもそも人間は誰もが他のすべての人間の補足とみなされるべきであり，そのような存在になるとき，人間はもっとも役に立つ，愛すべき者に思われる。このことはとりわけ旅行記や旅行者にこそ当てはまるに違いない。（15–422）

「著者」には自明なひとつの全体であっても，それを「読者」の心のなかに築くことは不可能ではないかという省察には，「著者と読者」のあいだの「巨大な深淵」に対する不安が顔をのぞかせている。しかし，ここではそれを補う力として，読者自身の熱心な関与に期待が寄せられる。「著者と読者」との協働作業こそが旅行記の理想的な読書であり，そのとき「著者」は「他のすべての人間の補足」にすぎない。『イタリア紀行』はシュタイン夫人のために書かれた旅日記やヴァイマルの友人たちに宛てた書簡，

そして個人的な日記をもとに編集されていた。このような個人的経験が創造的受容のイメージへと拡大され，「著者と読者」の理想的関係の原型となっている。

3.2 『滞仏陣中記』『マインツ攻囲』

続く『滞仏陣中記』『マインツ攻囲』は，『イタリア紀行』と同じ「わが生涯から」の第 2 部門として執筆されたが，『イタリア紀行』のような形式的統一は途中から崩れていく。前半は戦争手記らしい日記スタイルで始まるが，挿入された「中間の言葉」を境に，後半は『詩と真実』風の記述に移行していく[26)]。語り手ゲーテの省察が全面に現れる「中間の言葉」では，否応なく戦争へと駆り出された自分のこれまでの人生がスケッチされる。『詩と真実』時代は，大きすぎる内なる憧れに悩み，『イタリア紀行』時代には，芸術に向かうことが孤独な作業であり，「その喜びを他者と共有することは不可能」（14–463）であると認識したという。「あのすばらしい国へ，友人たちは想像力で喜んで私に同行した」（14–462）という明るい回想が繰り返されるにもかかわらず，同時に，他者と喜びを共有することのない孤独な作業というアンビヴァレントな省察が付け加えられている。同時期にゲーテの関心をひいた自然研究もまた，彼に孤独な作業を強いたという。このような状態でゲーテは戦場に連れ出されていった。

> フランス革命の不幸はますます広範囲に広がり［……］穏便なかたちではあるが，読者に今あえてお伝えする不快な出来事を，男らしく耐えねばな

26）トーマス・P・セインは，当時の他の資料と比較して，この作品がいかに戦争手記らしくないかを示し，語り手像や小説的構造を分析している。Thomas P. Saine: *Goethes Roman „Campagne in Frankreich 1792“*. In: W. Barner u. a. (Hg.): *Unser Commercium. Goethes und Schillers Literaturpolitik*. Stuttgart 1984, S. 529–558; Ders.: *Campagne in Frankreich / Belagerung von Mainz (1822)*. In: Lützeler u. a. (Hg.): *Goethes Erzählwerk*. S. 396–427.

> らなかったとき，私の心のもっとも内部にひきこもっていたやさしい温かいものがすべて，跡形もなく消え去ってしまいそうであった。（14–463f.）

こうした危機的状況を語らねばならない自伝的著作の後半は，「私の心のもっとも内部にひきこもっていたやさしい温かいもの」を回想によって取り戻そうとするかのように，当時の創作活動や自然研究についての説明と省察が織り交ぜられる。

しかし当時のゲーテの活動は，文学創作も自然研究の成果も，まわりからは受け入れられなかったと振り返られる。しかもマインツ攻囲も終結した後，作品の最終部分で，ゲーテは義兄弟で旧友のシュロッサーから次のように批判され，強い反発を感じる。

> 君はそんなに年をとっても相変わらず子供で世間知らずだ，と彼は言った。だから君は，自分が興味を感じるものには他人も共感するだろうとか，誰かが他人の行動に賛成して，同じようにするだろうとか，ドイツにおいて何か協働的な活動や協力関係が起こるかもしれないなどと妄想するのだ。［……］しかし，あまりに殺伐とした戦時状態から再び平穏な私的生活に戻ったにもかかわらず，私が一生懸命取りくみ，全世界の人々にも有用であり興味をもってもらえると思い込んでいた企画に，ともに関心を寄せてくれる仲間を希望することさえ許されないと言われて，私はこの上なく不愉快な印象を受けた。（14–556）

「著者と読者」の協働作業が否定されて終わるこの作品は，ゲーテの自伝的著作のなかでもっともペシミスティックな印象を与える。それはゲーテが，ドイツとフランスの戦いという素材のなかに，著者としての自身の理想的読者をめぐる戦いを重ねあわせているためであろう[27)]。

27）実際のシュロッサーとの再会は友好的なものであったと記録されているので，ゲーテは意図的にこのような省察で作品を終わらせたと考えられる。Vgl. 14–828f.

3.3 『第 2 次ローマ滞在』

しかし，シュロッサーによって否定された「著者と読者」の協働作業という理想に，ゲーテは次の「わが生涯から」第 2 部門の最後の作品『第 2 次ローマ滞在』で，今までとは異なるかたちで近づく道を見出している。この作品は，先に公表された『イタリア紀行』でナポリを出発したゲーテが，再びローマに到着して帰国するまでの半年あまりを記録した『イタリア紀行』の続編であるが，形式的には最初の 2 部とは大きく異なっている。『滞仏陣中記』で崩れていった形式は，ここでは，意識的に統一性を拒み，複数の作者をもつ文書の編集作業によって作成されている。まず月ごとに，旅行当時のゲーテの手紙を編集した「通信」の部と，他者の手紙や文章も挿入して当時の様子を再現・編集しようとする事後「報告」の部に分けられる。『イタリア紀行』では目に見えない協働作業者であった理想的読者が，『第 2 次ローマ滞在』でははっきりと執筆協力者となってゲーテの著作のなかに入り込んでくる。「著者と読者」の関係に期待したり落胆したりする主人公や語り手の省察ではなく，「著者と読者」という枠を超えた協働作業から「集合的」作品[28] を創造することが目論まれたのである。

3.4 『年代記』と「わが生涯から」の関係

『滞仏陣中記』と『第 2 次ローマ滞在』のあいだには，「わが生涯から」シリーズと対照的なもうひとつの自伝作品『年代記』が成立している。「誠実な告白をあちこちに差し挟む」（14–575）自伝ではなく，「作品も人生の出来事も，成立順に一列に並べて提供」（Ebd.）する年代記作成のために，1822 年にゲーテは自分の創作に関連するあらゆる資料を整理させ，

28）同時期に執筆された『遍歴時代』改稿について，ゲーテはこの作品の「集合的起源」を強調している。これは『第 2 次ローマ滞在』にもそのままあてはまるだろう。1829 年 11 月 23 日付，ロホリッツ宛て書簡。FA II, Bd. 11, S. 200.

ひとつのアルヒーフをつくった[29]。『第2次ローマ滞在』もゲーテのアルヒーフから生まれた自伝である。ゲーテの自伝的記述と学術的著作との関係を論じたシュテファン・コランニーは，『詩と真実』以後のゲーテの自伝的作品を芸術と学問の統合としての人間学的自伝とみなし，その協働作業的・集合的な性質を強調している[30]。その究極の形式は「自伝の自伝」[31]と呼ばれる『年代記』である。因果関係を放棄した異質なものの羅列からなるこの自伝形式は，読者の創造的関与を最大限に要求する。学問的方法が優勢になり，「脱文学化」[32]していく創作スタイルは，『西東詩集』*West-östlicher Divan*（1819/1827 年），『遍歴時代』そして『ファウスト』第 2 部 *Faust II*（1832 年）といったゲーテ晩年の文学作品全体に大きな影響を与えている[33]。

しかし自伝プロジェクト全体を見ると，一方で主観排除を究極まで推し進める『年代記』が実践されるのと並行して，「わが生涯から」シリーズでは，確かに「誠実な告白」から集合的作品へと基本構造は変化していくが，詩的な物語の精神は失われず，むしろ最晩年に再び活性化していくようにみえる。『第 2 次ローマ滞在』の「報告」の部には，集合的作品という編集スタイルをとりつつ，老ゲーテによる省察および当時の創作活動についての記述や，「『ヴェルター』に似た運命」（15–511）を見事に回避するミラノ娘との小さなアヴァンチュールという小説的要素が随所に織り交

29）『年代記』およびアルヒーフの成立事情については，拙稿「ゲーテの最後の自伝プロジェクト――『私のその他の告白の補足としての年代記』成立事情――」『ドイツ語学・文学』（慶應義塾大学日吉紀要）48 号（2011 年）283–307 頁。

30）Stephan Koranyi: *Autobiographie und Wissenschaft im Denken Goethes*. Bonn 1984.

31）Ebd., S. 176.

32）Ebd., S. 183.

33）アルヒーフ小説としての『遍歴時代』については，拙稿 *Von der Aktenführung bis zur Archivpoetik. Goethes Archivroman „Wilhelm Meisters Wanderjahre“*.『ゲーテ年鑑』（日本ゲーテ協会）50 号（2008 年）41–59 頁。

ぜられ，『詩と真実』的な描写が復活する。詩的な描写は，ローマを旅立つ直前の主人公に立て続けに働きかけ，彼を翻弄する「より高いデーモンたちの合図」（15–648），ミラノ娘との感動的な別れを演出した偶然，そして出発前夜，なじみの町が「異様な，幽霊じみた姿」（15–653）を呈するところで頂点を迎え，オヴィディウスからの引用で物語は閉じられる。『詩と真実』第 4 部では，リリーとの別離やヴァイマル行きが「デモーニッシュな外見を装った奇妙な事件」（16–822）として，偶然の支配のもとで物語られる。『詩と真実』を締めくくる自作『エグモント』からの引用は，太陽の比喩によって第 1 部冒頭の主人公誕生の記述に結びつき，物語を象徴的な円環として閉じるのである。

4 「著者と読者」を超えて――『詩と真実』第 4 部

『詩と真実』第 4 部は，短期間に集中的に執筆された先の 3 部とは成立事情が異なり，最初の口述が行なわれた 1813 年から，1816 年，1821 年，1825 年，そして 1830–31 年の 5 つの創作時期がある[34)]。それぞれ短期間であるが，作業が再開されるたびにシェーマが作られ，最終的に各章のなかには複数の時期の文章がモザイクのように組み合わされている。例えば 19 章でのラーヴァータの考察部分には，語り手自身が告白するように，異なった時代に書かれた複数の文章が無造作に羅列されている。先の 3 部より頻繁に挿入される自作の詩や断片の他，『第 2 次ローマ滞在』同様，他者の手紙（17 章のウルリーヒ・フッテン）や文章（19 章のラーヴァータの著作からの抜粋）が挿入され，集合的性格が顕著となっている。

第 4 部冒頭のスピノザに関する省察には，「『ヴェルター』と『ファウスト』の著者」（16–714）の次のような言葉が見られるが，実はこの部分

34）第 4 部成立事情については Siegfried Scheibe: *Der vierte Teil von „Dichtung und Wahrheit“. Zu Entstehungsgeschichte und Textgestalt*. In: *Goethe Jahrbuch* 30 (1968), S. 87–115.

はすでに 1813 年に第 3 部のために口述されていた[35)]。

> 誰も他人を理解しないということ，同じ言葉を聴いても誰も他人と同じことを考えないということ，ひとつの会話，ひとつの読書でも，人が違えばそれぞれに違う考えを呼び起こすということを，私はすでにあまりにもはっきりと理解していた。（Ebd.）

つまり第 4 部には，理想的な「著者と読者」を省察する初期の自伝に重なる部分と，「集合的」作品という創作実践によって「著者と読者」の協働作業を実現させようとする後期の自伝スタイルが共存しているのである。そこで，他の自伝的著作の完成を経て執筆された箇所でゲーテが「著者と読者」の関係をどのように描写しているかを確認するために，第 1 次スイス旅行のエピソードを取り上げる。このエピソードはリリーとの恋愛物語にとって重要な出来事であるばかりでなく，『ヴェルター』をめぐる「著者と読者」の省察にも深くかかわる素材である。執筆準備は 1813 年にさかのぼるが，最終的には 1830 年に初めて口述されている。

シュトゥルム・ウント・ドラングの天才主義を気取るシュトルベルク兄弟とともにスイスに向かう旅の始まりで，語り手ゲーテはまずダルムシュタットの友人メルクの口を借りて，第 3 部までの「著者と読者」の関係を総括する。

> 「君の努力は」と彼は言った。「つまり君の他にそらすことのできない傾向は，現実に詩的な形象を与えることだ。しかし他の人々は，いわゆる詩的なもの，空想的なものを現実化しようとする。そんなことをしても，愚かなことしか生まれないのに。」（16–766）

1813 年に書かれた 16 章スピノザに関する部分では，語り手は主人公に

35）1813 年秋までゲーテは 1775 年の記述を第 3 部に含む予定であった。

一体化して読者との距離を省察していたが，ここでは，第三者の視点を借りて，主人公からも距離を取っている。語り手ゲーテは続ける。「このふたつの行動パターンの巨大な差異を理解し，しっかりと心に留めてそれを応用してみると，多数の他のことがらも説明することができる」（Ebd.）。この後，主人公ゲーテはシュトルベルク兄弟と別れ，友人パサヴァンとともにイタリアへの分岐点となるゴットハルトの山頂に向かう。

> ほぼ2年前に『ヴェルター』を書いた青年と，あの驚くべき作品をすでに草稿で読んで熱狂した年下の友人を想像してみていただきたい。ふたりは，われ知らずのうちにいわば自然状態にもどり，過ぎ去った情熱を生き生きと思い出しながら，現在の情熱に身をゆだね，はかない計画を立てながら，快い力を胸に感じて，空想の王国をさまよい歩いていた。（16–784）

18章の終盤，語り手のこのコメントの直前に文体は突然変わり，日付と時刻の記述とともに比較的短い文章を重ねていく日記形式が始まっている。この1775年6月16日から22日までの1週間の描写には，1775年のゲーテ自身の旅日記が下敷きにされている。この手帳からゴットハルト山頂付近を抜粋して簡単な準備をしたところで，1813年，第4部の執筆は中断されてしまった。元の日記は完全な文章で書かれたものではなく，単語を羅列した走り書きにすぎないが，それゆえにかえって旅の高揚感が伝わってくる[36]。一方，1813年の草稿は，基本的にこれらの単語から完全な文章を書き起こしただけである[37]。1821年にはこの部分のシェーマ[38]も作成されたが，最終的に口述されるのは1830年11月で，第4部でほとんど最後に完成した部分である。一週間の行程は，自然科学者ゲーテによる自然描写で肉付けされ，抑制された文体によって再構成された。こうして晩年のスタイルに変換されたアルプスの広大な自然のなかに，「空想の王国

36）1–2–544f. (*Tagebuch. Schweizerreise 1775*)
37）FA I, Bd. 14, S. 925f.
38）Ebd., S. 927ff.

をさまよう」青年たちの情熱は小さく埋め込まれ，適度な距離をおいて眺められる。

一方，19 章でゲーテがチューリヒに戻ってみると，「いわゆる詩的なもの，空想的なものを現実化しようとする」シュトルベルク兄弟が，スイスの「詩的表現」を現実化するべく，公共の場で裸になって人々から石を投げられる滑稽な騒動を引き起こしていた。しかしこの奇行の描写でも，語り手は「善良で無邪気な青年たち」（16–795）から適度な距離を保ち，淡々と事件の経緯を報告する。迷惑を被ったのは主人公ゲーテではなく，ラーヴァータとされる。ゲーテが到着したときには，すべては平穏に帰していたのである。「現実に詩的な形象を与える」主人公の「自然状態」と，「詩的なもの，空想的なものを現実化」しようとするシュトルベルク兄弟の「自然状態」のあいだの「巨大な差異」に，主人公ゲーテは巻き込まれることなく，語り手ゲーテももはや悲観的な省察を差しはさまない。後に執筆した断片『スイスからの手紙』*Briefe aus der Schweiz*（1808 年）をめぐって生じた読者とのいざこざも，ただ補足的に紹介されるだけである。「ふたつの行動パターンの巨大な差異を理解し，しっかりと心にとどめて，それを応用」する晩年の視点は，「著者と読者」のあいだの深淵を，「内的な明朗さと外的な快適さ」をそなえた鳥瞰図として再構成している。

フリーデリーケ物語を分ける 10 章と 11 章が，「読者」から「著者」へと成長する主人公ゲーテの変化に対応していたとすれば，ゴットハルト山頂で分けられる 18 章と 19 章は，語り手ゲーテの変容を象徴する分岐点といえるのかもしれない。他の自伝的著作のなかで「著者と読者」の関係を模索した後，ゲーテはついに山頂に到着した。

> 私たちはついに小さな霧の海に到着した。そう呼ぼうと思うのは，それが大気の帯とほとんど区別できないものだったからである。まもなく霧のなかからひとつの建物が現れた。それは宿坊だった。厚く客をもてなす屋根の下に，まもなく保護してもらえるのだと思うと，私たちは大きな満足を

感じた。（16–787）

18 章を締めくくるこの一節は，旅日記に元になる部分を見出せず，1830 年に初めて書き加えられたと考えられる。岐路に立つ主人公ゲーテはイタリアには向かわず，慌ててリリーのいるドイツへと引き返していく。そして「著者と読者」をめぐる長い戦いの記憶を「小さな霧の海」のなかにそっと包み込むと，語り手ゲーテもまた，悠々と詩の国への帰路についたのである。

*

『詩と真実』第 4 部は，さらに 1831 年 4 月から 9 月にかけて部分的挿入や修正が加えられ，10 月に完成した。しかし 1833 年に公表されたとき，遺稿管理者のエッカーマンとリーマーは不完全に思われた元の原稿にさまざまに手を加えていた。アカデミー版ゲーテ全集（1970–74 年）で初めてジークフリート・シャイベは，エッカーマンらの編集の痕跡を排除し，元のゲーテの原稿に基づいて『詩と真実』を編纂した。今日，ミュンヒェン版全集もフランクフルト版全集もこれを継承している。しかし忘れてはならないのは，ゲーテの原稿に手を加えてよいと判断したほど，彼らが第 4 部の執筆過程に深く関与していたという事実である。1823 年以来，文学分野でのゲーテの大切な相談相手になったエッカーマンは，まさに好意的な読者として『詩と真実』第 4 部に対して提案を行ない，ゲーテはその多くを受け入れていた。口述筆記された原稿はリーマーに送られ，句読法から形式に至るまでチェックされる。リーマーの朗読を聴きながら，今度はゲーテがリーマーの提案内容を吟味する。受け入れられた修正が鉛筆で書き込まれ，インクで清書をするのは再び書記ヨーンの仕事であった[39)]。

「著者と読者」の協働作業という理念が最後に行きついた，こうした晩年のゲーテの創作スタイルが確立されなければ，ゲーテの自伝プロジェク

39）Scheibe: a. a. O., S. 96ff.

トの後半部――ゲーテ・アルヒーフ誕生（1822 年）をメルクマールとすれば，『年代記』，『第 2 次ローマ滞在』そして『詩と真実』第 4 部――は完成しなかったかもしれない。『詩と真実』は，「詩的形成衝動」に突き動かされた若いゲーテの詩的記録であると同時に，協働者に支えられ，アルヒーフに整理された自他の膨大な資料を「他のすべての人間の補足」として編集する晩年のゲーテの，「著者と読者」をめぐる長い戦いの結実でもある。